

アメリカの「見えざる国教」・資料

(資料 1)

三宅威仁 (訳) 『アメリカ教会の現実と使命：プロテスタント主流派・福音派・カトリック』(新教出版社)(Martin Marty, *The Public Church, Crossroad*, 1981) の「訳者あとがき」

現在、アメリカ合衆国で用いられているすべての硬貨には、E PLURIBUS UNUM というモットーが刻まれている。「多から一(が生じる)」という意味のこのラテン語は、アメリカが複数の州から成る国家であることを示している。硬貨を裏返すと、IN GOD WE TRUST という文字が見える。この標語は、アメリカ国民が神を信じ、国家を神に委ねるという決意を表している。・・・多様性を重んじながら統一を生み出すこと、個々人の信教の自由を守りながら国家全体の存在を神に根拠づけることは、アメリカの建国期からの課題であった。

従って、アメリカにおける政治あるいは宗教に関心を抱く者にとっては、この「多様性と統一」および「個人の信仰と社会の秩序」という問題は、避けて通ることのできない研究課題である。

(資料 2)

「アメリカの市民宗教」『社会変革と宗教倫理』未来社。(Robert N. Bellah, "Civil Religion in America," (1966) *Beyond Belief: Essays on Religion in Post-Traditional World*, Harper & Row, 1970.)

市民宗教→「見えざる国教」

すべての民族、すべての国民は、批評家が好もうと好むまいと、ある形態の宗教的自己理解に達すると私は信じている。

アメリカの市民宗教は、教会と並んで、そしてそれは明確に分化されたものとして、精巧な高度に制度化された市民宗教が現実に存在しており、その背後には、聖書的な原型 (archetypes)、出エジプト、選ばれた人びと、約束の地、新しいエルサレム、犠牲の死と再生があるが、それは同時に、真にアメリカ的であり、真に新しいものであり、それ自身の預言者、それ自身の殉教者があり、それ自身の聖なる行事、聖なる場所があり、それ自身の荘重な儀式と象徴がある。

(資料 3)

ドイツの神学者 Jurgen Moltmann, "American Dream," *Commonweal*, August 5, 1977, p. 491.

アメリカは「共通の過去を持っていないために、共通の未来についての意志を欠くと、昔の個別の民族的アイデンティティへと逆行してしまう国」である。

(資料 4)

憲法修正第 1 条 (1791 年)

連邦議会は国教を定める (establishment of religion) ための、また宗教の自由な活動 (free exercise) を禁止するための、いかなる法律も制定することはない。また、発言と出版の自由を禁止し、人びとが平和裡に集会し、不満を正すために政府に対して請願する権利を制限するための、いかなる法律も制定することはない。

(資料 5)

1995 年 7 月 12 日のクリントン大統領の「公立学校における宗教表現についてのメモランダム」 (*Memorandum on Religious Expression in Public Schools*)

多くのアメリカ人が考えている以上に、憲法修正第一条では、公立学校での宗教表現は許されている。

生徒による純粋に個人的な宗教的発言は禁止されていない。

個人的、集団的祈りや、宗教についてのディスカッションは許される。

聖書を読んだり、聖書以外の聖典を読んだり、食前の感謝の祈りを祈ったり、試験の前に祈ったりすることも。

宗教を宣教すること (religious instruction) はしてはならない。

宗教について教えることはいい。

聖書やその他の聖典。宗教史、比較宗教学、文学としての聖書、アメリカとその他の国の歴史における宗教の役割、芸術、文学、社会に対する宗教の影響。

放課後の課外活動として、宗教活動を行う時には、他の課外活動と同様に学校の施設を使うことができる。(Equal Access Act)

(資料 6)

メモランダムの 2 カ月後の、ギャラップ調査機関による世論調査

(参照: *PRRC Emerging Trends*, September 1995.)

公立学校の祈りに賛成する者: 71%

全員参加?: 反対: 81%

その祈りはキリスト教の?: 全ての世界宗教(all major religions)の: 81%

(資料 7)

米西戦争 (1898 年) を決意した時の、マッキンリー大統領。

私は毎晩、夜中までホワイト・ハウスのなかを歩き回っていた。・・・私はいく晩も全能の神に光と導きを祈った。そして、ある晩おそく、次のように神の光と導きが示された。それがどのようにして示されたかは私には分からない。しかし、確かに示されたのだった。その内容は(1) フィ

リピンをスペインに返すことはできない。そうすることは臆病で、不名誉なことである。(2) フィリピンをフランスやドイツに渡すことはできない。東洋における経済的なライバルを利することは、採算が合わないことであるし、不名誉なことである。(3) フィリピンをフィリピン人にまかすことはどうか。彼らは自己統治に適しておらず、すぐに現在のスペインの統治よりもさらに悪い状態である無政府状態に陥るだろう。(4) 残されている道は、フィリピン人を教育し、高め、文明化し、キリスト教化するために、アメリカがフィリピンを統治することである。・・・こうして、私はベッドに入り、眠りについた。そして、ぐっすりと眠ることができた。

(資料 8)

リンカーンの第二期目の大統領就任演説 (1865 年)

両者とも戦争が現在のように拡大し継続するとは予期していませんでした。この戦いの終結とともに、あるいはそれ以前に、この戦いの原因となったものが消滅しようとは、両者とも予期しませんでした。・・・両者とも同じ聖書を読み、同じ神に祈り、そして各々敵に打ち勝つために神の助力を求めています。・・・両者の祈りが双方とも、聞き届けられるということはあり得ませんでした。彼の祈りも私の祈りもそのままには聞き届けられませんでした。

全能の神は彼自らの目的を持ちたまいます。・・・我々がひたすら望み、切に祈るところは、この戦争という巨大な咎が速やかに過ぎ去らんことあります。しかし、もし神の欲し給うところが、奴隷の 250 年にわたる報いられざる苦役によって蓄積されたすべての富が絶滅されるまで、また鞭によって流された血の一滴一滴に対して、剣によって流される血の贖いがないがなされるまで、この戦争が続くことであるならば、三千年前に言われた如く、今日なお「主の審きは真実にしてことごとく正し」と言わねばなりません。